

「在日朝鮮人一世としての作家・立原正秋」(3)
—小林勝の著作を参考資料として—

総谷 智雄

Author TATIHARA Masaaki as the Korean resident in
Japan First Generation (3)
-Through “Broken hoofs” and “A father and son” -

KASETANI Tomoo

神戸医療福祉大学紀要 第19巻 第1号
(平成30年12月)

<原著>

「在日朝鮮人一世としての作家・立原正秋」(3)
—小林勝の著作を参考資料として—

梶谷 智雄

Author TATIHARA Masaaki as the Korean resident in Japan First Generation (3)
-Through “Broken hoofs” and “A father and son” -

KASETANI Tomoo

I want to consider about a relation between the Korean and the Japanese by comprehension of both KOBAYASHI Masaru's novel “Broken hoofs” and TATIHARA Masaaki's novel “A father and son”. And want to approach the ethnic identity of TATIHARA Masaaki.

Was TATIHARA Masaaki “released” as a Korean by defeat of Japan in 1945? He wrote “A father and son” by his folk name in 1948. Before living through as “Japanese”, if it was a kind of “release” I say, it seems to note down the facts experienced as a Korean at Korea as a colony

Key words : colony control by Japan, ethnic identity,

Korean resident in Japan First Generation, release

日本による植民地支配、民族意識 (エスニック・アイデンティティ)、

在日朝鮮人一世、解放

要 旨

筆者は、小林勝の小説「蹄の割れたもの」と立原正秋の小説「ある父子」を理解することから、朝鮮人と日本人の関係を考察したい。そして、立原正秋の民族意識に接近したい。

立原正秋は、1945年の日本の敗戦によって、朝鮮人として「解放」されたのだろうか？彼は、1948年に民族名で「ある父子」を執筆している。それは、「日本人」として生きていく前の「解放」であり、植民地朝鮮において朝鮮人として経験したことを記録することだったと思われる。

1. はじめに

前稿では、主に1960年代～70年代に執筆活動を行った作家である立原正秋（たちはらまさあき：1926-1980）が、民族名の金胤奎（キム ユンギョ）で執筆（1948年）・発表した小説「ある父子」をテキストとして、在日朝鮮人一世¹⁾である彼の民族意識を探ろうと試みた。

本稿では、立原正秋と同年代を生きた日本人作家である小林勝（こばやし まさる：1927-1971）の作品を参考資料として加えることにより、立原正秋が作品に込めた民族意

識などについて、さらに考察を進めていきたい。

2. 接近方法

本稿では、小林勝の小説「蹄の割れたもの」と、前述の「ある父子」、主としてこの二作品に描かれた朝鮮人と日本人の関係、朝鮮人に関する記述などにもとづいて考察を進めていくが、その過程においては、その他の文献なども参考資料として活用する。

3. 小説「蹄の割れたもの」と「ある父子」

小林勝は、被植民者であった立原正秋とは対照的に、日本人植民者の息子として朝鮮南西部で生まれ育ち、日本の敗戦後、帰国して作家活動を展開する。彼の小説には、植民者としての実体験に基づき、自らを省察する視点から描かれたものが多い。「蹄の割れたもの」は、1969年に発表された小説であり、作品集『チョッパリ』（1970）に収録されている。かつて植民者の息子であった主人公による回想が柱となっているこの作品において大きな比重を占めるのが、少年時代の主人公「ぼく」と、彼の家で働いていた朝鮮人女性である「エイコ」の関係だ。

「ある父子」は、前稿で述べたように、在日朝鮮人一世である立原正秋が、民族名である金胤奎（キム ユンギョ）を名乗って1948年に執筆し、『自由朝鮮』3巻1号（1949年）に掲載された小説だ。この作品では、植民地朝鮮において差別・搾取される朝鮮人の惨状と、植民者である日本人と被植民者である朝鮮人の関係が活写されている。

立原正秋が日本に渡る前に、生まれ育った朝鮮で体験し、見聞きした被植民者・朝鮮人の社会的立場は、植民者であった日本人・小

林勝が描いた小説における日本人と朝鮮人の関係から、一層明確に見えてくる。

次項では、立原正秋の作品「ある父子」と小林勝の作品「蹄の割れたもの」を通して、植民地朝鮮における朝鮮人と日本人の関係について考察していく。

4. 「エイコ」と「オクスニ」、「ある父子」と立原正秋

小説「蹄の割れたもの」の主要登場人物は、植民地朝鮮において旧制中学校4年生（現在の高校1年生）だった「ぼく」と、彼の家で働いていた朝鮮人女性（「ぼく」よりも何歳か年上と推測される）の「エイコ」だ。初対面のとき（1943年）に、彼女は自分の名前を「エイコだよ」と「ぼく」に告げ、「ほかにはもうどんな名前もないんだから、それをわすれるなって役人がいったよ、だからわたしはエイコという名前しかもうないんだ」²⁾と述べる。

これは、前々稿で述べたように、1937年に日本に渡った「金胤奎」が1940年には「金井正秋（かない まさあき）」と名乗るようになった「創氏改名」（朝鮮人に日本風の名前を名乗らせるという政策）を連想させる。

立原正秋の小説「ある父子」に登場する父子の名前は、李光植と李達浩である。ストーリーが展開される年代は明記されていないが、父子の名前が民族名であることや、立原正秋が朝鮮で生活していた時期（1926年～1937年）を考慮すると、1940年代よりは前であろうかと推測される。

この作品において、李達浩は次のようなことを考えている（表記は原文のまま）。

うすぼんやりとではあったが、達浩は自分の住んでいる社会全体が、日本人によつて運営されており、さからう者は破滅するという

ことを知った。百姓は自分の作つた米が食えず、麦や粟ばかりが与えられ、もし作つた米を全部供出しないで多少とも隠蔽している疑いがあると、早速面事務所（引用者注：「面」は、当時の地域行政地区の単位）から若い役人が現れ家宅搜索をやる。これに立ち会つて少しでもさからいの言葉を述べたが最後、老いた農夫は若い役人に頬を打たれる。役人は大概、日本人に使はれている普通学校出身位の朝鮮人で、なんの批判力も持ち合はせていない者ばかりだ。自国の百姓を搾取する、日本人を手伝う。悲しいことではあるが、こういう例は事実だつた³⁾。

ここで述べられている「さからう者は破滅するということを知った」ということは、「さからわなければ破滅は免れられる」ということに通じる。すなわち、破滅しないように、生命だけは維持できるように「さからわない」という意識が、被植民者である朝鮮人たちの間に浸透していったことが、ここから推測される。前述の「蹄の割れたもの」における、「だからわたしはエイコという名前しかもうないんだ」ということばは、このような「さからわない」意識が広く浸透した結果であるといえよう。

では、植民者である日本人・「ほく」と、被植民者である朝鮮人・「エイコ」の関係、すなわち、日本人である「ほく」が、自宅の使用人である朝鮮人女性を「エイコ」と呼び、「エイコ」が「ほく」を「ほっちゃん」と呼ぶ関係は、永続的なものだったのだろうか。周知のとおり、答えは「否」である。「ほく」と「エイコ」が出会った1943年の二年後（1945年）、日本の敗戦にともない、朝鮮は植民地支配から解放される。

「蹄の割れたもの」では、日本の敗戦直後の「エイコ」と「ほく」の姿が、次のように

描かれている。

前方から手に手に旗を持った男や女や子供たちの一団が、歌いながら、わめきながら、笑いながらやってくるのだったが、その中にほくはエイコの顔をみつけたのだった。エイコはとっくにほくに気付いていたようだった。一団とすれちがう時急にエイコは顔を固くすると、するするとほくの方へやってきた。能の面だ、とほくは思った、はじめて逢った時のあの能の面だとほくは思った。エイコ、と思わずほくは言った。するとエイコは強く首をふった。

そうだった。エイコなんて、しょせん架空のものであり、日本人だけがその実在をおろかに信じていた虚像にすぎなかったのだ。エイコなんて女は、はじめからどこにもいなかったのだ。

あたしは、オクスニ、と女はゆっくり言った。不意に聞きおぼえのある喉の奥の含み笑いがほくをふるわせた。彼女はきらきら光る眼で、ほくの顔をじっと見た。その時、ほくは電光のように、彼女の眼の中の言葉を読みとった、あたしはオクスニ、そして、あんたはチョッパリ、と⁴⁾。

「オクスニ」は、朝鮮語では「옥순이」であり、「옥순：オクスン（玉順）」という朝鮮語の女性の名前に、会話で呼びやすくするための「이（イ）」という音が付着した結果の読み方である。また、「チョッパリ（쪽발이）」は、蹄が割れた状態の足を意味するもので、日本人（下駄や草履を履く姿が割れた蹄を連想させるという説がある）の蔑称として用いられている。

「わたしはエイコという名前しかもうないんだ」と述べていた朝鮮人女性は、日本の植民地支配が崩壊したことにより、「オクスニ」という名前を取り戻すことができた。すなわ

ち、彼女は解放されたのである。

「オクスニ」が解放される数年前に生涯を終えることになる、「ある父子」における李光植の最期を、立原正秋は次のように描いている。

そこには、ながい間、搾取され通しの一人の朝鮮人の最後のありさまが、はつきり表現されていた。学ぶことを禁ぜられ、住むところをうばはれ、喰うものも着るものも持ちさられ、そうされたことによつて一つの宿命観を植えつけられ、牛の如くのろのろと激しい労働を強制されて亡びゆく朝鮮人の縮図が、さからえば、またそれなりに、手段をえられない日本人の残虐性の下に亡びゆく朝鮮人の縮図が、一人の過剰労働をして倒れた樵夫によって表現されていた⁵⁾。

このように「亡びゆく朝鮮人」の一人として植民地朝鮮で生まれ育ち、「解放」など想像もできなかった1930年代に日本に渡った立原正秋は、日本の敗戦によって「解放」されたのだろうか。1969年に刊行された著書の巻末における自著年譜で、「昭和二十年、日本と朝鮮が滅亡することを切にねがう。八月、終戦」⁶⁾と、彼は記している。

この「日本と朝鮮が滅亡することを切にねがう」心理とは、どのようなものであったのだろうか。「日本の滅亡を願う」心理は、朝鮮を植民地にして朝鮮人を圧迫してきた「大日本帝国」が滅亡することを願うことと推測されるが、「朝鮮の滅亡を願う」心理とは、どのようなものなのだろうか。

1937年に11歳で渡ってきた日本は、金胤奎であった当時の立原正秋にとって、居心地のよい場所では決してなかった。母語である朝鮮語よりも日本語を使うことを強いられる学校生活などにおいて、彼が味わった葛藤・労

苦は、筆者の想像を超えるものだったに違いない。しかし、前々稿で述べたように、立原正秋は1939年（13歳）には横須賀市立商業学校に入学し、2年生ごろから、夏目漱石、森鷗外、島崎藤村、川端康成などの日本の近代小説を愛読するようになる。これと平行して、徒然草などの日本の古典文学にも関心を抱くようになる。そして1945年（19歳）、彼は早稲田大学専門部法科に入学するが、戦時徴用により、日本鋼管鶴見工場に通う日々が続く。そして、日本の敗戦・朝鮮の「解放」を迎える。

1945年の日本の敗戦によって、朝鮮は植民地支配から解放された。しかし「解放」と同時に、朝鮮の北部にはソ連（当時）が、南部には米国がそれぞれ駐留することにより、植民地支配に代わり、実質的な分断統治・管理が行われることになる。このような「祖国」の現状を、立原正秋が知らなかったとは想像しづらい。

近代日本文学を愛読し、日本の古典文学にも親しむようになっていた立原正秋は、文化的には日本社会に相当に同化していたと推測される。1946年（20歳）に早稲田大学文学部の聴講生になったことは、日本の敗戦、すなわち「大日本帝国の滅亡」と関わりなく、日本文学への傾倒が、彼の中で進行していたことを物語っている。

立原正秋が前述の「昭和二十年、日本と朝鮮が滅亡することを切にねがう。八月、終戦」という文を書いたのは、1969年に刊行された著書においてである。

「朝鮮の滅亡」が何を意味するのか、なぜこのような文を立原正秋が書いたのかについては、現段階で判断することは困難であるが、彼が生まれ育った朝鮮、日本に渡ってから回想する朝鮮、日本の敗戦後に分断された朝鮮という、さまざまな朝鮮の姿を考慮した上で、「滅亡することを切にねがう」というこ

とばが生み出されたのであろう。

5. 「金井正秋」と「金胤奎」、そして1948年の「米本正秋」

「蹄の割れたもの」における朝鮮人女性「エイコ」は、日本の敗戦にともない解放され、「オクスニ」という名前を取り戻す。

しかし、「金井正秋」が「金胤奎」に戻るには、あまりにも長い月日が、日本において流れていた。11歳で朝鮮から日本に渡った「金胤奎」が「金井正秋」として日本の敗戦を知ったのは、19歳の時だ。自宅では、母親たちと朝鮮語で会話をしていたことが想像できるが、学校など、家庭外での会話はすべて日本語であった。そして前述のように、1946年(20歳)に早稲田大学文学部の聴講生になったことから、8年間の生活によって、文化的に日本社会に相当に同化していた彼には、「解放」と同時に北部にはソ連(当時)が南部には米国がそれぞれ駐留することになった「祖国」朝鮮に帰る考えは、極めて希薄であったことがうかがえる。

1947年に出された外国人登録令は、日本に在住する朝鮮半島出身者・台湾出身者を、「外国人」として登録することを定めていた。これにより、在日朝鮮人・在日台湾人たちは、「大日本帝国臣民」として日本国籍を持つにもかかわらず、「外国人」として登録されることになる。そして日本が主権を回復した直後(1952年)、日本政府は在日朝鮮人の日本国籍を一方的に抹消する。

この戦後処理に関しては、ドイツとの差異がきわめて大きい。日本と同様に、隣国オーストリアを「併合」したドイツは、敗戦後東西に分断されたが、当時の西ドイツは、自国に在住するオーストリア人に、国籍選択権を認めている⁷⁾。

日本社会に相当に同化し、日本での定住を

ほぼ決意して、早稲田大学文学部の聴講生になった直後に「外国人登録」を強いられた「金井正秋」は、どのような心境だったのだろうか。自分が生まれ育った朝鮮を植民地にして朝鮮人を圧迫してきた大日本帝国は、滅亡した。しかし新しい日本は、日本国籍を持つ自分を「外国人」として排除する。そして、「解放」されたはずの祖国は、北にはソ連が、南には米国が駐留し続けている。自分のよりどころは、どこにあるのか……。彼は、このような思いを抱いていたのではないだろうか。

そして1948年。前々稿、前稿でも述べたように、この年は立原正秋にとって特別な意味を持つ年だ。前述のように、同年7月の長男誕生にともない、米本光代との婚姻を通して彼女の戸籍に入ることにより、「金井正秋」の戸籍上の名前は「米本正秋」となる。これにより彼は、外国人登録という鎖から解放される。そして8月には大韓民国が樹立し、9月には朝鮮民主主義人民共和国が樹立し、朝鮮半島の分断は決定的なものになる。

前々稿でも紹介したが、長男誕生に際して彼が詠んだ詩「言祝ぎ(ことほぎ)の日」は、次のようなものである。

言祝ぎの日

巨大な複眼のような空から
途方もない面積をしめ
ひかりが拡散してふってきた日

言祝ぎの日だ

妻よ これは男の子だ
途方もなくうれしい日だ

息子よ

おまえが生まれた日は
五月なかば

椎の嫩葉に光が砕け それは
見ゆるかぎりの世界を
微粒子のように充たし
丘では馬が嘶いていた
なんと広い世界だろう
なんと光の多い日だろう
なんと美しい日だろう

巨大な複眼のような空から
途方もない面積をしめ
ひかりが拡散してふるなかを
妻よ おまえは男の子をうんだ
この廣大無辺の面積のなかでは
小さな粒子でしかない
おまえらが
私には
なんとやさしい存在だろう⁸⁾

この詩を立原正秋は、詩集『光と風』、小説『冬の旅』、小説『冬のかたみに』において、計3回用いている。当時の状況を考慮すると、「息子を得た喜びにあふれた詩」としてのみ、単純にこの詩の意味を解釈すべきではなからう。

前述のように、よりどころを失っていた彼にとって、息子が誕生し、家族を持つことになったことは、自らのこれからの人生における「根本的なよりどころ」を得るものであったと考えられる。「言祝ぎの日」の3回にわたる使用は、そのよりどころを再確認することに他ならなかったのではないだろうか。

妻・光代の次のような証言が、それを裏付けている。「家族にへばりついてゐるみたいでした。寂しいひとでした。家族以外に心を打ち明ける相手がゐなかったんでせう」⁹⁾。これは、在日朝鮮人二世である歌手・新井英一が、自らのルーツをたどる旅を歌った自作曲「清河（チョンハー）への道」において、「家

族が俺の国だよと妻と子供を抱き寄せた」¹⁰⁾と述べていることと共通するものがある。

そして、戸籍上の姓が「米本」になった彼は、同年秋に金胤奎という民族名で、小説「ある父子」を執筆し、この作品は翌年発表される。これは前稿で述べたように、自らが「金胤奎」という朝鮮人として生まれ育ち、日本に渡る11歳までに体験・見聞きしてきた、植民地朝鮮の実情を記録することであり、それは「被植民者」であった自分の原点を確認し、記録することであった。

自分は朝鮮に戻ることなく、これから、「米本正秋」という「日本人」として日本で生きていく。しかし自分の原点は、まちがいなく朝鮮半島にある。そこで自分が経験したこと、見聞きしたこと、それらを「なかったこと」にしたままでは、新たな一歩は決して踏み出せないと、彼は考えたのではないだろうか。すなわち彼にとって、民族名・金胤奎で「ある父子」を執筆・発表することは、「日本人」としてこれから日本で生きていくことが確定した自らに課した、「通過儀礼」だったのではないだろうか。

その「通過儀礼」は、精神的に大きな負担をもたらすものだったと想像できる。日本による植民地支配の下で差別・搾取され続けて「亡びゆく朝鮮人」の姿を描くことは、まだ癒えない傷口に触れるようなものであり、強い痛みをとまなうものだったであろう。

しかしそれは「金井正秋」にとっては、「日本人・米本正秋」として生きていく前に、「朝鮮人・金胤奎」としての自分をふりかえり、検証することであり、そして金胤奎としての作品を残しておくことは、前述した「エイコ（オクスニ）」の「解放」とは異なる形ではあっても、部分的な「解放」と呼ぶべきものだったのではないだろうか。

植民地朝鮮において朝鮮人として自らが体

験したこと、見聞きしたことをふりかえり、記述することは、「金井正秋」にとっては、避けようと思えば避けることができたはずだ。まだ癒えぬ傷口に触れずに、それを覆い隠して生きていくこともできたはずである。しかし、あえてその傷口に触れて、朝鮮人としての自分を振り返り、作品として公表することは、朝鮮人・金胤奎の延長線上に「金井正秋」が存在すること、そして「日本人・米本正秋」が存在するということを開示することだった。その自己開示は、自分の過去を否定したり隠蔽したりせずに直視して、それをリアルに記録するという、「解放」と呼ぶべきものではなかっただろうか。

そして立原正秋がその「解放」をなしたしたのは、彼が前述の「根本的なよりどころ」を得たためではなかったかと、筆者は推測する。

「金井正秋」は、「エイコ」のような「解放」を味わうことはなかった。彼は「金胤奎」として朝鮮に戻ることはなく、「米本正秋」という「日本人」として日本で生き続けることを選択した。しかし、その選択をした彼が、「金胤奎」という民族名で、自らが体験・見聞きした植民地朝鮮における実情を書き残したことは、朝鮮に原点を持つ在日朝鮮人一世としての「解放」を、一部ではあるにせよ、自らの力によってなしたといえるのではないだろうか。

6. おわりに

ここまで、前々稿、前稿の考察に続いて、小林勝の小説を参考資料として加えて、在日朝鮮人一世としての作家・立原正秋の民族意識に迫ろうと試みてきた。

小林勝が描いた植民地朝鮮における日本人と朝鮮人の関係、朝鮮人の意識、そして「解放」について考察することにより、立原正秋

の詩「言祝ぎの日」の意味、小説「父と子」を執筆した背景などが、より鮮明になってきたように思われる。

今回は立原正秋が執筆したエッセイなどをテキストとして、彼の民族意識にさらに接近することを試みる。

引用文献・註

- 1) 筆者は、日本で定住・永住することになった朝鮮半島（済州島なども含む）にルーツを持つ人たちを総称して「在日朝鮮人」と表記する。その中には、朝鮮籍、韓国籍、日本籍の人たちが含まれている。
- 2) 小林勝：蹄の割れたもの、チョッパリ 小林勝小説集、34-35、三省堂、東京、1970
- 3) 金胤奎：ある父子、山本武利他編、占領期雑誌資料大系 文学編Ⅳ第4巻、132、岩波書店、東京、2010
- 4) 小林：前掲書、57
- 5) 金：前掲書、138
- 6) 立原正秋：剣と花 鎌倉夫人 現代長編文学全集49、403、講談社、東京、1969
- 7) 田中宏：日本の戦後処理と国籍問題、経済学論集、46 (5)、137、龍谷大学経済学会、2007
- 8) 立原正秋：冬のかたみに、213-215、新潮社、東京、1975
- 9) 高井有一：立原正秋、111、新潮社、東京、1991
- 10) 新井英一：C D 清河への道、歌詞カードより、meldac、1995

